

(調査報告)

在韓日本人妻高齢者の調査報告

藤 田 則 貴

キーワード

国籍 芙蓉会 在韓日本人妻高齢者

要約

本研究は、在韓日本人妻高齢者に関する調査結果の報告及び考察である。

今回とりあげる在韓日本人妻高齢者の存在は、芙蓉会という在韓日本人妻の親睦団体によって把握することができる。その芙蓉会に所属する在韓日本人妻高齢者を対象とし、生活歴や現在の生活状況について、マクロデータ（芙蓉会の名簿による調査）とミクロデータ（インタビュー調査）の結果から研究の枠組みをもとに明らかにし、考察を試みている。

1. 研究の背景

本研究は、1910年から1945年までの間、当時日本の領土とされていた朝鮮（現：韓国と北朝鮮）の男性と結婚した日本人女性が、現在韓国においてどのような生活を送ってきたのか又は、送っているのかという生活歴や生活状況について、国籍の違い・家族関係や公的・私的なサポートの有無などによって明らかにすることを目的とする。彼女らの生活歴や生活状況についての手がかりは、芙蓉会という在韓日本人妻の親睦団体によってある程度把握することができる。

ここで、在韓日本人妻について整理をしておく。日本においては、朝鮮から第2次世界大戦前後に日本に連行されたり、来日した人々を在日韓国人・在日朝鮮人と呼んでいる。一方で、1980年以降に来日した、いわゆる「ニューカマー (Newcomer)」という人々も存在する。その視点で考えると、当然韓国においても同様のことがいえるが、ここでは、日本から第2次世界大戦前後に韓国に渡った日本人を在韓日本人とし、「ニューカマー (Newcomer)」と分けて考えていくこととする。

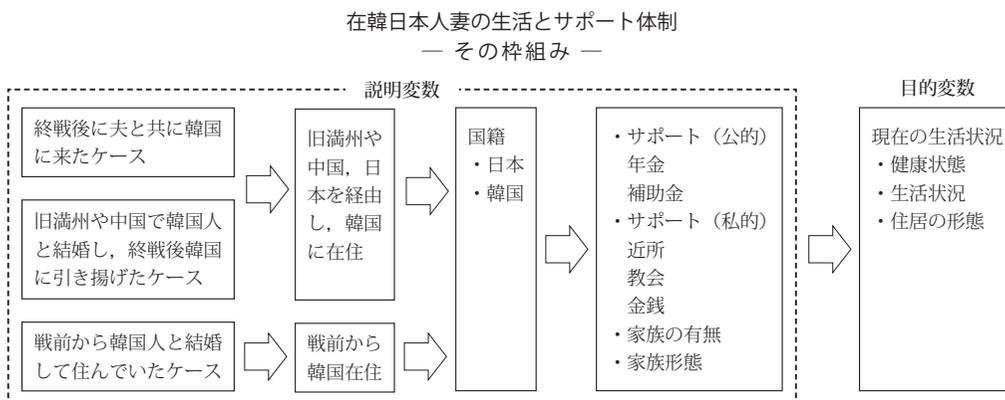
今回の調査に至るには、2004年9月、2005年2月と9月、時期をおいて、2011年3月と今回調査を行った9月の合計5回調査を行っている。その際、前半部分については、日本老年社会学会の発表において共同研究を行った劉氏、2004年の調査当初からは、東京経済大学の奥山氏も同様に調査研究に加わっている。

今回の調査報告においては、前述した芙蓉会の協力を得ながら、マクロデータとミクロデータの結果のうち一部を報告するとともに、現状や課題について考察することとする。

2. 目的

今回とりあげる在韓日本人妻についての研究の代表的なものとしては、金¹の在韓日本人妻の貧困研究が挙げられるが、個人の生活状況、特に現在の生活状況についての部分については、詳しくふれられていない。

そこで、今回は、前述した芙蓉会に所属する在韓日本人妻高齢者を対象とし、その生活歴や現在の生活状況について、マクロデータ（芙蓉会の名簿による調査）とミクロデータ（インタビュー調査）の結果から下記に示す研究の枠組みをもとに明らかにすることを目的とする。



3. 対象と方法

調査の対象は、芙蓉会に所属している在韓日本人妻高齢者である。そのうち、今回の調査報告については、マクロデータとして、芙蓉会のソウル本部現会長からのきき取り調査によって明らかになった名簿による調査。ミクロデータについては、ソウル市近郊に在住している在韓日本人妻高齢者へのインタビュー調査（一部）の両方の視点から報告する。

また、特にミクロデータの調査内容は、韓国の歴史的な出来事と関連して、在韓日本人妻高齢者の生活歴を軸に沿って分析するライフコース・アプローチを採用した。その中でも重要なのは、直井²が示すように、歴史的な出来事の経験によって、その時代を共にして生きた人々がそれぞれの生活・ライフコースにどのように影響しているのかを明らかにすることである。

調査の方法は、まず、マクロデータについては、芙蓉会が1998年1月現在の会員名簿を基に、今回3月に調査を行った。その調査内容は、名簿に記載されている項目である。具体的には、①所属 ②国籍 ③氏名 ④生年月日 ⑤生死 ⑥原籍・本籍地 ⑦現住所 ⑧同居の有無等である。その8項目をデータ入力し、SPSSによって分析を行った。

次に、ミクロデータについては、上記の名簿の中から主にソウル支部に所属している会員のうち、下記に示すパターンの4類型の中から5ケースを選定した。今回の報告については、その内の1ケースをとりあげる。4類型とは、①夫と離別・死別し、子どもがいないため一人で暮らしているケース、②夫及び子どもと別れて一人で暮らしているケース、③夫及び子どもと老年期まで暮らしたが、不安定な暮らしをしたケース、④夫及び子どもと老年期まで安定した暮らしをしたケースである。

4. 結果及び考察

今回の対象である在韓日本人妻高齢者は、金³によると、3つのルートで韓国に渡っている。1つは、戦前日本にいた韓国人男性（当時朝鮮人）が日本人女性と結婚し、1945年の終戦とともに一緒

に韓国に渡ったケース。2つは、終戦とともに中国残留日本人が日本へ引き揚げる際にその一部が韓国で足留めになって住みついたケース。3つは、1945年以前から韓国（当時朝鮮）に在留していた日本人女性が、韓国人と現地で結婚して終戦後も引き揚げずにそのまま残留したケースである。また、今回対象の在韓日本人妻高齢者は、ほとんどのケースが1つ目のパターンであり、一部3つ目のパターンがみられる。

(1) 名簿による調査結果

芙蓉会のソウル本部作成による会員名簿によると作成当時では、1本部6支部が置かれており、会員数は247名登録されていた。今回の調査においては、ソウル本部現会長からのきき取り調査によって、表1が示すようになっている。作成当時と比べると生存者が少なくなり、現在においては、生存者は、139人と全体の約6割となってしまった。一方、死亡と行方不明者を合わせると、108人で約4割となった。また、生存者の平均年齢は、86.5歳であり、最高年齢は、101歳、最低年齢は、59歳である。

表1 会員の状況

	度 数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効 生	139	56.3	56.3	56.3
死	65	26.3	26.3	82.6
不明	43	17.4	17.4	100.0
合計	247	100.0	100.0	

また、現在、生存者が何処に多く住んでいるのかを示したものが、表2である。表2によると、生存者は、全羅南道が最も多く23人、次いで同率21人でソウル特別市と忠清南道となっている。その一方で、死亡者28人及び行方不明者30人については、ソウル特別市が最も多くなっている。

表2 会員の居住地と現在の状況

度数		生 死			合 計
		死	生	不 明	
現 住 所	ソウル特別市	28	21	30	79
	仁川広域市	4	5		9
	光州広域市	4	15		19
	京畿道	11	12	8	31
	江原道		1		1
	忠清北道	2	14	1	17
	忠清南道	3	21	3	27
	全羅北道	2	22	1	25
	全羅南道	8	23		31
	慶尚北道	1	1		2
	慶尚南道		1		1
	済州特別自治道	1	1		2
合計		64	137	43	244

次に、対象者の国籍の状況をみてみると、表3のようになっている。日本籍が最も多く91人、次いで韓国籍の85人、二重国籍の71人となっている。わが国においても韓国においても、二重国籍は、

国籍法上認められていないが、実際には、さまざまな理由によって存在している。

表3 国籍の状況

	度 数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効 日本籍	91	36.8	36.8	36.8
韓国籍	85	34.4	34.4	71.3
二重籍	71	28.7	28.7	100.0
合計	247	100.0	100.0	

対象者の出身地を上位5位まで挙げると、北海道出身者が最も多く、27人。次いで、大阪府出身の18人、東京都出身の14人、福岡県出身の13人、鹿児島県出身の11人となり、福井県と山梨県を除いた45都道府県に及んでいる。

(2) インタビュー調査結果

- ・対象者：山形県出身 Aさん（韓国籍）83歳
Aさんの夫（韓国籍）85歳
Aさんの娘（日本籍）50歳
と同居。
- ・対象者の居住地：ソウル特別市
旧日本軍（下級官僚）が住んでいた官舎で5軒長屋の一軒（2DK）を今年（2011年）の春にリフォーム（娘さんがリフォーム）し、娘と同居している。
- ・対象者の居住地の様子



対象者Aさんの自宅前の様子



対象者Aさんの自宅内部の様子

- 4 対象者Aさん（以下Aさんとする。）は、前述した3つのルートで韓国に渡っているケースの中で、特に1つ目のケース【戦前日本にいた韓国人男性（当時朝鮮人）が日本人女性と結婚し、1945年の終戦とともに一緒に韓国に渡ったケース。】の中でも、4類型の3つ目【夫及び子どもと老年期まで暮らしたが、不安定な暮らしをしたケース。】である。

研究の枠組みとして、説明変数（韓国に渡ってきたケース、国籍（日本籍・韓国籍）、サポート体制（公的・私的）、家族の有無、家族形態）と目的変数（現在の生活状況（健康状態・生活状況・住居の形態））を設定した。

その枠組みの中でも特に説明変数の項目を中心に、半構造化面接法を使って、対象者にインタ

ビュー調査を行った。

まず、Aさんは、鹿児島県にある知覧で飛行機の整備士をしていた現在の夫と知り合う。その後、夫の故郷である韓国と一緒に渡り、現在まで生活をしている。しかし、その間、チョッパリ＝日本人に対する差別用語（浴衣や着物姿で歩く際に足首が見え、それが豚足に似ていることから名付けられたと言われ続けている。）と言われ、差別を受けたが、現在は近所との接触も少ないため、そのようなことはない。また、国籍は、大きな問題を抱えている。娘さんは、韓国でも有名な国立大学を卒業したが、現在においても日本国籍であるが故に定職に就けず、日本語講師を掛け持ちして生計を立てている。Aさんも娘さんが差別を受けるのを避けるために途中から韓国籍となっている。現在は、日本からの生活援助金と娘さんの講師料（日本語の受講生が減ったために、受講生の頭数で講師料が決まる。）のみで生活しているため、生活状況も悪い。健康状態においては、Aさんは、病弱であり、夫も癌を患い、現在は、糖尿病で治療を受けているために、生活費も薬代で殆ど消えてしまう状況である。

(3) 考察

国籍の問題

今回までの調査を受けて、彼女らが、1945年以降、異国の地韓国において生活していくには、計り知れない苦労や差別を受けてきたことが分かる。現在においては、彼女らの努力によって差別等は軽減されつつあるが、当時（1945年から1960年）は、韓国政府によって一貫して反日政策を行っていたこともあり、また、それに伴って人々の反日・排日感情がより一層韓国での生活を困難にさせた。

特に、その中でも国籍の問題は、大きい。大きく分けると、韓国国籍、日本国籍、二重国籍の3種類となるが、金⁴⁾によると、韓国国籍の日本人妻は、韓国男性と結婚し、婚姻届によって夫の戸籍に入籍され日本国籍から除外された結果、韓国国籍を取得するようになった。一方、さまざまな理由で婚姻届を提出しなかった者は、日本国籍あるいは二重国籍となった。

前述したAさんのように国籍は、大きな問題を抱えている。Aさんは、途中から国籍を日本国籍から韓国国籍へと変更している。その理由として挙げられるのが、娘に対する就職への影響である。周知のとおり、韓国においては、近年特に就職難が続いている。韓国国籍の学生と同等に勝負することを考えると、日本国籍であるAさんの娘さんは、スタートラインの段階で不利な状況に置かれている。本来、韓国において有名な国立大学を卒業した場合、フルタイムで働くことができるが、前述したようにAさんの娘さんは、国籍の問題が就職を阻んでいるという状況に置かれている。

芙蓉会の存在

在韓日本人妻高齢者の調査を始めて今回で5回目となるが、彼女らの生活の中で、経済的、精神的な支えとなっているのが“芙蓉会”である。芙蓉会は、定期的に会員同志で会って交流を深めているが、併せて会員同志の心の支えとなっている。また、日本からの生活援助を受けている在韓日本人妻高齢者の窓口となり、経済的な援助の支えとなっている。また、「里帰り」の際も芙蓉会が窓口となり、日本に残る親戚との親睦を深めているのである。その一方で、芙蓉会会長へのインタビューによると、以前に芙蓉会会員が「里帰り」をする際に日本の親戚から「会いたくない。」と、拒否され、門前払いを受けた例があった。それ以来、直接親戚に出向いて会うのではなく、会う際には、ホテル等で会うようにしているとのことだった。

このように、韓国国内において計り知れない苦労や差別を受けてきた一方で、唯一の心の支えと

なり得るべく日本の親戚においても上記のような状況であることから、共に苦労を分かち合い、心の支えとなる芙蓉会の存在意義は大きいといえる。

5. おわりに

これまで、マクロデータ（芙蓉会の名簿による調査）とミクロデータ（インタビュー調査）の結果から分析を続けてきたが、今回取り上げたのは、【戦前日本にいた韓国人男性（当時朝鮮人）が日本人女性と結婚し、1945年の終戦とともに一緒に韓国に渡ったケース。】の中でも、【夫及び子どもと老年期まで暮らしたが、不安定な暮らしをしたケース。】のみの報告である。今回は、一部しかとりあげていないため、今までの5回の調査においては、課題や問題が多数残されている。そのため、今後も継続して調査をするとともに、改めて報告したいと考えている。

追記

今回の調査も含め、本調査の目的や意義をご理解いただき、全面的に支援してくださった芙蓉会の会長様、また、インタビュー調査の目的や意義をご理解いただき、インタビューにご協力いただいた芙蓉会会員の皆様に、この場をお借りして心より御礼と感謝を申し上げます。

注

- i 金應烈「在韓日本人妻の貧困と生活不安」『社会老年学』No.17, 1983, 東京大学出版会
- ii 直井道子「高齢者と共に生きる」高等学校家庭科教科書『家庭総合』2006東京書籍
- iii 金 前掲書
- iv 金 前掲書

参考文献

- 1) 森岡清美「ライフコース研究の意義」『決死の世代と遺書 補訂版 一太平洋戦争末期の若者の生と死一』1995 吉川弘文館
- 2) 石川奈津子『海峡を渡った妻たち』2001 同時代社
- 3) 伊藤孝司『[新版] 日本人花嫁の戦後 韓国・慶州ナザレ園からの証言』2002 LYU工房

(受理 平成23年9月26日)